

角川
漢和中辞典

貝塚茂樹 友忍
藤野岩野 編
小

漢和中辞典

貝塚茂樹
藤野岩友 編
小野忍

角川漢和中辞典

落丁・乱丁本はお取替え致します	発行所 株式会社 角川書店	編者 貝塚野塚 源茂樹 義忍友樹	定価 1000円
	印刷者 東京都新宿区西五軒町三二 佐川一郎	発行者 中内川	昭和三十四年四月一日初版發行
	製本者 東京都文京区古川町一四一 鈴木俊一	編者 小藤貝 川野塚 源光義 岩茂忍	昭和三十九年一月二十五日四十版發行
電話 九段 ○一 一(代表 者)	東京都千代田区富士見町二の七 振替口座 東京一九五二〇八 ○一一		

◎

整版 跳印刷・印刷 跳美術・製本 鈴木製本

【一目瞭然】かりうもくせん ひとめ見ただけでは
つきわかる。

【一石】(いっせき) 重さの単位。四鉤^(よつ)（一鉤は三十斤）。(いっせき) 容量の単位。十斗。↓付録「度量衡表」。國^一約一八〇・三九リットル。(2)材木などの容量の単位で、十立方尺の実積をいう。

【一石二鳥】(いっせきにじゅう) 一つの石で同時に二羽の鳥を打ち落とす意で、一つの事をして同時に二つの利益を得ること。「一举两得」。

【一件】(いっけん) 国^一一つの事がら。(2)ある事件。(3)例のこと。あのこと。

【一任】(いんじん) (1)一度任せする。(2)すっかりまぜる。(3)さもあらねえ。まよよ。

【一両】(いっりょう) (1)車一両。(2)一輛(りょう) (2)数の少ないこと。「一丁」。(国^二江戸時代の貨幣の単位。一分銀の四倍。「る」。

【一匡】(いっくわう) 天下の秩序を立て統す。

【一向】(いこうかう) ひとたず。ひとすじ。もっぱら。(国^一意専念。^二向^一まるで。全く。いっさく)

【一回】(いっかい) 次の略。

【一向宗】(いこうそう) (仏) 浄土宗から分かれた真宗のことで、親鸞上人(しんらんじゆらん)の開いた宗派。

【真宗】(しんそう) 門徒宗。

【一團】(いつだん) (1)ひとたまり。一つの団体。

【一如】(いっしやく) (1)真理は一つで、平等無差別であること。(2)一体になって分かれてないことは異なるなどのこと。「莊・天道」。

【一存】(いっそん) (1)自分ひとりの考え方。

【一句】(いっくつ) (1)ひとまがり。水流など(まがりかど)。(2)音楽のひととき。(3)一方のみに片寄り全体に通じないこと。「莊・天道」。

【一束】(いっしゆく) (1)ひと枝。(白居易・詩「綠水紅蓮一束開」) (2)ひと群れ。「一束の雲」

【一氣】(いっけい) (1)天地の氣。万物の根本の力。(2)ひとりき。ひとおも。

【一周】(いっしゅう) ひとまぐり。ひとまわり。(同上) 正・徒一位。(3)松柏^(マツ)科の常緑樹。

【一味】(いみ) 食物の味わいが一樣であること。「國^一同じ仲間。味方」「一徒党」。

【一應】(いとう) すべて。いっさい。(國^一ひととおり。ひとまず。とにかく。同^一往^一)

【一弄】(いもう) (1)一度音樂を奏ずる。弄^(お)は樂曲の意。(2)鳥が一度さえすること。

【一次】(いっし) (1)一番目。最初。初め。(2)回。(3)例のこと。このこと。

【一決】(いっけつ) (1)きっぱりと決める。(2)相談がまとまる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書きしたもののひとくだり。(3)一つの事がら。

【一系】(いっけい) (1)ひとすじ。ひと続き。ひと続きの血脈(けみゃく)。(2)一方のみ。一つのくく。(3)本の一つの。(4)貨幣の単位。「元の十分の一」。(5)ひとすじ普通よりすぐれていること。ひとときわ目(ひとときわめ)。

【一角】(いっかく) (1)一方のみ。一つのくく。(2)一隻(いっせき) (3)俗) 貨幣の単位。「一元の十分の一」。(4)ひとすじ普通よりすぐれていること。ひとときわ目。

【一言】(いっげん) (1)一字。(2)一句。(3)とばや動作。

【一往】(いわう) (1)一つに定まる。「一つに定める。」(2)きまとへるること。「一の方針」。

【一宗】(いっそう) 一族に同じ。(漢書・吳王濞伝) 「天下一死長安」。(3)仏教のある宗派。

【一乘】(いっじやう) 大砲一つ。(3)悟りを開き成仏することができるたゞの教え。どんな人間でも平等に仮の救いを受けられる最上の法門。法華經の法門。(2)車一台。特に兵車。

【一舍】(いっしゃく) 三十里。軍隊の一日の行程が三十里であったことからいふ。

【一束】(いっしゆく) (1)身うち。同胞。一家。一族。(2)束ねたもの。身うちの同胞。

【一空】(いっくう) すべてではない。なにもない。

【一更】(いっこう) 五更の第一の時刻。今夜の午後八時。

【一束】(いっしゆく) およびその前後二時間。↓初更。

【一束】(いっしゆく) ひどたば。一時にまとめる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書きしたもののひとくだり。(3)一つの事がら。

【一系】(いっけい) (1)ひとすじ。ひと続き。ひと続きの血脈(けみゃく)。(2)一方のみ。一つのくく。(3)本の一つの。(4)貨幣の単位。「元の十分の一」。(5)ひとすじ普通よりすぐれていること。ひとときわ目(ひとときわめ)。

【一角】(いっかく) (1)一方のみ。一つのくく。(2)一隻(いっせき) (3)俗) 貨幣の単位。「一元の十分の一」。(4)ひとすじ普通よりすぐれていること。ひとときわ目。

【一言】(いっげん) (1)一字。(2)一句。(3)とばや動作。

【一往】(いわう) (1)一つに定まる。「一つに定める。」(2)きまとへるること。「一の方針」。

【一宗】(いっそう) 一族に同じ。(漢書・吳王濞伝) 「天下一死長安」。(3)仏教のある宗派。

【一乘】(いっじやう) 大砲一つ。(3)悟りを開き成仏することができるたゞの教え。どんな人間でも平等に仮の救いを受けられる最上の法門。法華經の法門。(2)車一台。特に兵車。

【一舍】(いっしゃく) 三十里。軍隊の一日の行程が三十里であったことからいふ。

【一束】(いっしゆく) (1)身うち。同胞。一家。一族。(2)束ねたもの。身うちの同胞。

【一空】(いっくう) すべてではない。なにもない。

【一更】(いっこう) 五更の第一の時刻。今夜の午後八時。

【一束】(いっしゆく) およびその前後二時間。↓初更。

【一束】(いっしゆく) ひどたば。一時にまとめる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書きしたもののひとくだり。(3)一つの事がら。

【一系】(いっけい) (1)ひとすじ。ひと続き。ひと続きの血脈(けみゃく)。(2)一方のみ。一つのくく。(3)本の一つの。(4)貨幣の単位。「元の十分の一」。(5)ひとすじ普通よりすぐれていること。ひとときわ目(ひとときわめ)。

【一角】(いっかく) (1)一方のみ。一つのくく。(2)一隻(いっせき) (3)俗) 貨幣の単位。「一元の十分の一」。(4)ひとすじ普通よりすぐれていること。ひとときわ目。

【一言】(いっげん) (1)一字。(2)一句。(3)とばや動作。

【一往】(いわう) (1)一つに定まる。「一つに定める。」(2)きまとへるること。「一の方針」。

【一宗】(いっそう) 一族に同じ。(漢書・吳王濞伝) 「天下一死長安」。(3)仏教のある宗派。

【一乘】(いっじやう) 大砲一つ。(3)悟りを開き成仏することができるたゞの教え。どんな人間でも平等に仮の救いを受けられる最上の法門。法華經の法門。(2)車一台。特に兵車。

【一舍】(いっしゃく) 三十里。軍隊の一日の行程が三十里であったことからいふ。

【一束】(いっしゆく) (1)身うち。同胞。一家。一族。(2)束ねたもの。身うちの同胞。

【一空】(いっくう) すべてではない。なにもない。

【一更】(いっこう) 五更の第一の時刻。今夜の午後八時。

【一束】(いっしゆく) およびその前後二時間。↓初更。

【一束】(いっしゆく) ひどたば。一時にまとめる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書

【一味】(いみ) 食物の味わいが一樣であること。「國^一同じ仲間。味方」「一徒党」。

【一應】(いとう) すべて。いっさい。(國^一ひととおり。ひとまず。とにかく。同^一往^一)

【一弄】(いもう) (1)一度音樂を奏ずる。弄^(お)は樂曲の意。(2)鳥が一度さえすること。

【一次】(いっし) (1)一番目。最初。初め。(2)回。(3)例のこと。このこと。

【一決】(いっけつ) (1)きっぱりと決める。(2)相談がまとまる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書

【一味】(いみ) 食物の味わいが一樣であること。「國^一同じ仲間。味方」「一徒党」。

【一應】(いとう) すべて。いっさい。(國^一ひととおり。ひとまず。とにかく。同^一往^一)

【一弄】(いもう) (1)一度音樂を奏ずる。弄^(お)は樂曲の意。(2)鳥が一度さえすること。

【一次】(いっし) (1)一番目。最初。初め。(2)回。(3)例のこと。このこと。

【一決】(いっけつ) (1)きっぱりと決める。(2)相談がまとまる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書

【一味】(いみ) 食物の味わいが一樣であること。「國^一同じ仲間。味方」「一徒党」。

【一應】(いとう) すべて。いっさい。(國^一ひととおり。ひとまず。とにかく。同^一往^一)

【一弄】(いもう) (1)一度音樂を奏ずる。弄^(お)は樂曲の意。(2)鳥が一度さえすること。

【一次】(いっし) (1)一番目。最初。初め。(2)回。(3)例のこと。このこと。

【一決】(いっけつ) (1)きっぱりと決める。(2)相談がまとまる。

【一条】(じゅうとう) (1)ひとすじ。(2)個条書

七を人さし指を折り曲げて数える(折り)こと
からきたどうり。

字義 ①ななつ。なな。②ななたひ。「七回」。(3)文体の名。賦體(散文の韻文化)

したものの)の一。漢の枚乘の「七發」魏の「七

曹植の「七啓」などが有名。「國訓」なな

回」。③後刻の「七時」などがある。「國訓」なな

午後四時。

参考 七を音符とする字、呪(シジ)、切(セツ)
【七夕】せきばな 五節句の一。陰曆七月七日
の夜、牽牛星(牛郎星)と織女星(女星)の川を
渡って、年にたび一度会うといふ伝説(荊楚歲
次記)で、午前四時。また、申(の)の刻で

午後四時。

【七出】しあし 次項に同じ。

【七去】しあし 儒教で妻を離縁する七つの条件。
父母にすなおでない者、子のない者、品行のみ
だらな者、ねたみ深い者、すぐにならない病気
のある者、多言な者、盗みをする者をいう。(大
戴礼)。

【七生】しあい (仏) 七たび生まれ変わ
る。幾度もこの世に生まれ変わる。

【七色】しあく 七つの色。赤、黄、青、緑、紫、紺、
構(か)。また、太陽の光を分解した色。紫・藍・
青・緑・黃・橙(オレンジ)・赤。

【七言古詩】じゅんこくし 漢詩の一体。一句が七語
(七言)から成り、韻が一定してないもの。

【七言律詩】じゅんりつ 七語(七字)の句八句でで
きてる漢詩で、第三・第四の句と、第五・第
六の句とがそれぞれ対句になつてゐるもの。

他の他諸説がある。(回)七珍。(回)七草。(回)七
瑞(めぐみ)。玻璃(ボウル)・琥珀(カバ)・珊瑚(サンゴ)・
珊瑚(サンゴ)。金・銀・瑞(めぐみ)。竹林の七賢。

【七草】へなな ①春の七草。正月七日の七草が
目日の夜の祝い。(源氏物語・柏木)

【七宝】(寶) しあく 七種の宝石。金・銀・
瑞(めぐみ)・玻璃(ボウル)・琥珀(カバ)・珊瑚(サンゴ)・
珊瑚(サンゴ)。金の物の略。焼き物の名。

【七草】へなな ①春の七草。正月七日の七草が
目日の夜の祝い。(源氏物語・柏木)

ゆに入れる七種の野菜。せり・なすな・ごきょう・
はなべ・ほたけのき・すずな・すしらる。(2)秋の七
草。はきすすき・ききょう(またはあさがお)・な
草(はきすすき・ききょう(またはあさがお)・な
草)。はきすすき・ききょう(またはあさがお)・な
草(はきすすき・ききょう(またはあさがお)・な
草)。

はくべ・ほとけのき・すずな・すしらる。(2)秋の七
草(はきすすき・ききょう(またはあさがお)・な
草)。

【七情】じじょう 七種の感情。喜・怒・哀・
懼(おそれ)・愛・惡(にくむ)・欲。

【七教】じゅうきょう 宗教の道の教。(礼・王・制)
長幼・朋友・父・友・賓客の道の教。(禮・王・制)

【七德】じゅうとく 地・人・利・道の七つに従え。(時・機
会・助(地の利)・和(人の和)・足(財豊か)の七

明(徳明らか)・失(過失なし)・功(成就)の七
徳を得ること。(逸周書)

【七雄】じゅう 中国戦国時代の七強国。齊・楚・
秦・燕・趙・魏・韓。

【七德】じゅう 丈(王)の力・道の七つ。暴を禁じ
る兵を止める大を保つ・功を定める・民を安
心する・衆を和める・財を豊かにする。

【七難】じゅうなん ①種の非難・恵点。(仏) 七種
の災い。法華経では火・水・羅刹(刀杖)・鬼・枷鎖(か)・怨賊(怨恨)の災難をいう。

【七難】じゅうなん ②聖人の胸にあるといふ
人の頭部にある七つの穴。

【七難】じゅうなん ③人の胸にあるといふ
眼・耳・鼻・口の七。

【七難】じゅうなん ④聖人の胸にあるといふ
七つの穴。比干が殷(殷の)討(討)王の暴虐をい
ふれてそれを祭る行事。乞巧(せうこう)・

【七出】しあし 次項に同じ。

【七去】しあし 儒教で妻を離縁する七つの条件。
父母にすなおでない者、子のない者、品行のみ
だらな者、ねたみ深い者、すぐにならない病気
のある者、多言な者、盜みをする者をいう。(大
戴礼)。

【七生】しあい (仏) 七たび生まれ変わ
る。幾度もこの世に生まれ変わる。

【七色】しあく 七つの色。赤、黄、青、緑、紫、紺、
構(か)。また、太陽の光を分解した色。紫・藍・
青・緑・黃・橙(オレンジ)・赤。

【七言古詩】じゅんこくし 漢詩の一体。一句が七語
(七言)から成り、韻が一定してないもの。

【七言律詩】じゅんりつ 七語(七字)の句八句でで
きてる漢詩で、第三・第四の句と、第五・第
六の句とがそれぞれ対句になつてゐるもの。

他の他諸説がある。(回)七珍。(回)七草。(回)七
瑞(めぐみ)。玻璃(ボウル)・琥珀(カバ)・珊瑚(サンゴ)・
珊瑚(サンゴ)。金・銀・瑞(めぐみ)。竹林の七賢。

【七草】へなな ①春の七草。正月七日の七草が
目日の夜の祝い。(源氏物語・柏木)

【七宝】(寶) しあく 七種の宝石。金・銀・
瑞(めぐみ)・玻璃(ボウル)・琥珀(カバ)・珊瑚(サンゴ)・
珊瑚(サンゴ)。金の物の略。焼き物の名。

【七草】へなな ①春の七草。正月七日の七草が
目日の夜の祝い。(源氏物語・柏木)

【七面鳥】じゅうめんとり (國) 七人の福の神。大黒
のところが種々に変色する。肉は食用。

【七香車】じゅうこうしゃ 七種の香木で造つたとい
うすぐれで美しい車。

【七福神】じゅうふくじん (國) 七人の福の神。大黒
・寿老人。

【七難】じゅうなん ①種の非難・恵点。(仏) 七種
の災い。法華経では火・水・羅刹(刀杖)・鬼・枷鎖(か)・怨賊(怨恨)の災難をいう。

【七難】じゅうなん ②聖人の胸にあるといふ
人の頭部にある七つの穴。

【七難】じゅうなん ③人の胸にあるといふ
眼・耳・鼻・口の七。

【七難】じゅうなん ④聖人の胸にあるといふ
七つの穴。比干が殷(殷の)討(討)王の暴虐をい
ふれてそれを祭る行事。乞巧(せうこう)・

【七出】しあし 次項に同じ。

【七去】しあし 儒教で妻を離縁する七つの条件。
父母にすなおでない者、子のない者、品行のみ
だらな者、ねたみ深い者、すぐにならない病気
のある者、多言な者、盜みをする者をいう。(大
戴礼)。

【七生】しあい (仏) 七たび生まれ変わ
る。幾度もこの世に生まれ変わる。

【七色】しあく 七つの色。赤、黄、青、緑、紫、紺、
構(か)。また、太陽の光を分解した色。紫・藍・
青・緑・黃・橙(オレンジ)・赤。

【七言古詩】じゅんこくし 漢詩の一体。一句が七語
(七言)から成り、韻が一定してないもの。

【七言律詩】じゅんりつ 七語(七字)の句八句でで
きてる漢詩で、第三・第四の句と、第五・第
六の句とがそれぞれ対句になつてゐるもの。

他の他諸説がある。(回)七珍。(回)七草。(回)七
瑞(めぐみ)。玻璃(ボウル)・琥珀(カバ)・珊瑚(サンゴ)・
珊瑚(サンゴ)。金・銀・瑞(めぐみ)。竹林の七賢。

にである。②壯年の男子。二十歳。「壯丁」。

③おどり。召し使われる男。下男。

④よほろ。人夫。

⑤つよい。さかんである(壯)。

⑥あたる(あたる)(当)。《国訓》ちよう(ちやう)。⑦距

離の単位。六十間約。百九十九メートル。同町。

【語】タウは字義のとき。①ねんごろの

同訓は憲(西日本ペーパー)を見よ。

③人名、のり。あつ。

【丁】①とうき。①斧(おの)で木を切る音。②碁

を打つ音。③もくじ。《國》統接着て物を打

つ書き。

【丁夫】とうとう。①前戸の男。②おまじやく。

③二十歳前後の男。

【丁半】とうわん。①國の偶数奇數。②すぐ

るの賽(さい)の目。

③勝負など。ばくち。

【丁壯】とうじょう。わかもろ。同壯丁。

【丁年】とうねん。一人えになる年。満二十歳。

成年。

【丁當】とうとう。腰つけた玉の触れる音

や風鈴などの音。

【丁役】とうえき。兵役にあたる者。同丁従事。

昔、公務にあたった者。また、諸国から京都に

のぼつ役所の雜役に服した男。

【丁男】とうめい。働き盛りの男子。同壯丁。

【丁年】とうねん。時刻の名。今年の午前二時、および

その前後二時間。→四更。

【丁東】とうとう。丁当に同じ。

【丁香】とうこう。香木の名。ちょうじ。

てなんらかに科に属し、熱帯に産する。実を丁子

といふ。香料に用いる。(杜甫・丁香詩)

【丁祭】とうさい。丁香の(ほみ)。結んで解

はな(いたとぞ)。李商隱・代贈詩)芭蕉不_レ展

【丁稚】とうち。孔子の祭の名。中国で陰曆の二

月と八月の初めの丁の日に行なう。

【丁數】とうすう。①國の(ひ)で割り切れ

る数。偶数。②本や帳面などの紙の枚数。

【丁稚】とうち。若者。青年。①(ひ)。《國》商店

などに年限を決めて召し使われる幼少の者。

【丁寧】とうねい。怠慢のないこと。親切。

【丁憂】とうゆう。あたる(うれし)父母の喪(うつ)

の事。

【丁憂】とうゆう。あたる(うれし)父母の喪(うつ)

の事。

【丁頬】とうきょう。あたる(うれし)前項に同じ。

【丁字】とうじ。一丁字も知らない。一つの

△包丁・壯丁・成丁・馬丁・園丁

下手(こっしや)。手をくだす。やり始める。

着手する。①へした。した。①下の方。②技能や

学力などが手より劣る人。②上手(うまい)。③

①芝居の舞台の見物席から向かって左

の方。②上手(うまい)。③上手(うまい)。

△へた。技芸などのますいこと。②上手(うまい)

文字も知らない。一丁字も知らない。

【艱(かか)】

作物などのよくない性質。

【三老】①下寿(壽)。じ。八十歳。↓

【下走】さかう。①自分を謙そんしていうことは。②

死者の魂の集まる所。②むらさ

と。いなか。(陸機・文賦)綴(つづ)ー於白雪こ

下奴(ぬし)。かり。車から降りて走る。

【下里】かり。①死人の魂の集まる所。②むらさ

と。いなか。(陸機・文賦)綴(つづ)ー於白雪こ

下文(ふみ)。①かん。あとにある文章。下の段にある

文章。(△ふみ)昔、官庁から人民に対して出

した公文書。また、政事(せいじ)から出した公文。

【下水】げすい。①國の雨水や台所や井戸(いど)の水。

②その水を流すみぞ。③上水。

【下火】(あ)。①(仏)禪宗で死人を火葬するとき、火をつけるしぐさ。転じて、火葬。(△あ)は唐

音。(△あ)はた。①大事のとき、火の勢いが衰えること。(△あ)はだ。②すべて物事の勢いが衰えること。(△あ)はだ。

【下世】せか。①死ぬこと。②下界に同じ。

【下付】かはず。役所から証明書・許可書などを出

すこと。同下附。

【下半】(かはん)。下の方半分。「一一身」。②上半。

【下司】けいしき。①肯(けん)、身分の低い役人。

【下付】かはず。役所から証明書・許可書などを出

すこと。同下附。

【下奴】(かど)。召使。しもべ。下郎。②自分を

謙そんしていうことは。同下走。

【下人】(かど)。地面。大地。(詩・郊風)照

していうことは。

【下平】(かほひら)。①漢語の四声の一である平

声(じこゑ)を上平(じこゑ)に分けたもの。平板に発音

する。②現代中國語の上り調子の声調。

【下旁】(かほひり)。下品で卑しい。

【下劣】(かひやく)。下品卑しい。

【下向】(かむかう)。國の都から地方へ行く。②

神社に参拝して帰ること。

【下卑】(かひ)。下等な馬。足ののろい馬。

【下直】(かじきまき)。値段の安いこと。安値。(△高

【下知】(かげし)。國の上からの命令。さしす。仰せ。

【下乘】(かじょう)。①乗物から降りること。

②(仏)身近な教理。平凡な教理。(△小乗)。

【下地】(かじ)。土地。地面。(△上天)。△じ

【下品】(かひん)。①(△)極楽淨土の中品。卑

い地位。(△ほん)①(△)極樂淨土の中品。

△かひん)①下等な品物。②下等の階級。卑

い地位。(△ほん)①(△)極樂淨土の中品。

△かひん)①人がらの卑しこと。②上品・中品。

【下郎】(かろう)。①心の底。本心。(△まえまえか

ら心に思つてゐること)。『しい人』貧乏人。下の

心に思つてゐること)。

【下元】(かげん)。三元の一。陰曆十月十五日。

【下心】(かころ)。①心の底。本心。(△まえまえか

ら心に思つてゐること)。

【下作】(かさく)。國へたな作品。藝術作品や農

【下界】(かわい)。人間の住む地上の世界。この世。

代に田安や、一橋は清水をなす三家。
 〔三尊〕(さんそん) ①三つの尊ぶべきもの。君・父・
 師。(さんじ) ②(人)①阿彌陀如来(あみだにょくし)・觀音普
 薬師(やくし)・勢至菩薩(セイジ・ボサツ)。③薬師如來(やくし・じゆし)・日光菩薩(日光・ボサツ)
 〔三尊來(來)〕(さんそんらい) 迎(むか)へる・菩薩(ボサツ)・
 勢至(セイジ)・觀音(ケンオン)の三尊が出現して淨土へ導く
 〔三復(さくふ)〕(さんふく) 何度も戻る返す。
 〔三朝(さんじょう)〕(さんじょう) ①元旦(おととせ)の朝。一年の朝。
 ②一月の朝、一日の朝であるからいふ。(画)三始(さんし)
 〔三元(さんげん)〕(さんげん) ①三日をいう。(天子)が政治を見る所。宮廷(うきてい)。
 燕朝(えんてう) (休む所)・内朝(うつめ) (天子が政治を見る所)・外朝(朝廷が政治を見る所)の三つ。(4)
 一日に三度宮廷に行ひこと。(5)三代の君主。
 〔三才(さんざい)〕(さんざい) ⑥子どもが生まれて三日目の祝い。
 天・地・人のこと。三才。

〔三筆(さんし)〕(さんし) ①国と平安時代、書道で最もすぐれた
 三人。嵯峨天皇(さがてんのう)・橘逸勢(きよの)・空海(くうかい)。
 〔三絶(さんぜつ)〕(さんぜつ) ①詩・書・画の三つが特にすぐれてい
 ること。(2)三首の絶句。(3)三つのすぐれたら
 の。(4)三度切れること。「草履(くつ)」
 〔三丈(さんじょう)〕(さんじょう) 三丈食事をする人。
 〔三傑(さんけつ)〕(さんけつ) 三人のすぐれた人物。たとえば、(4)
 前漢の蕭何(あらわ)、張良(ばりょう)韓信(かんしゆ)。(5)獨漢(かくかん)
 の諸葛亮(しょくしゃう)・関羽(かんう)・張飛(ばりょう)。
 〔三嘆(さんたん)〕(さんたん) 感心して幾度もほめる。
 〔三思(さんし)〕(さんし) 三つの欠点。諭(しらべ)・詛(まどろみ)・落
 着(さく)など。(6)腹(はら)を立てをする。(7)譬(たと)え物の見
 分けができない。賢(ひらめ)いこと。(論)・(8)物の見
 〔三樂(さんらく)〕(さんらく) ①君子の三つの楽しみ。
 一家の平和・心にやましくないこと、英才の教
 育。(孟子)「君子有三一」、而王玉氏
 下、不才存焉。(9)春・夏・秋の三時の務
 越語。(10)三つの願い・望むもの。益
 になるものと損になるものがあり、礼樂を節す
 めを励まし、その業を楽しませること。(国語)。
 〔三綱領八条(じょうりよう)〕(さんねうじょうりよう) 〔目〕(はなこじょうりよう) 〔條〕(へう)

〔大學(だいがく)〕(だいがく) 「大學」の明徳(めいとく)・明徳(めいとく)・親
 民(みん)にしたむ・止(とど)かず・至(いた)る・至(いた)る・至(いた)る・至(いた)る
 〔三賦(さんふ)〕(さんふ) 〔賦(ふ)〕を三綱領といふ。格物・致知・誠意・正
 心・修己・平天下を八条目とい
 〔三賦(さんふ)〕(さんふ) 昔の租・庸・課の三税。(う)
 〔三器(さんき)〕(さんき) 國を治める三つのうち。号令・斧
 鐵(てつ)・禮賞(れいしょう)。(國)三種の神器。孔子(孔夫子)・禹(よ)・周公(しゆこう)
 文王(文王)・武王(武王)・周公(周公)。(画)孔子・老子(老)・叔(しゆ)・周公
 〔三跡(さんせき)〕(さんせき) 三人の書のうまい人。小野
 道風(みちふう)・藤原佐理(とうげんさり)・藤原行成(とうげんこうじ)

〔三載(さんさい)〕(さんさい) 三年。載は歳。

〔三鉢(さんぱく)〕(さんぱく) (仏)真言宗で用いる仏具。鉢はも
 のと天竺(てんしゆ)。(印度)インド)の
 を器(うつわ)といふ。煩惱(ぼんのう)を
 両端(りょうばん)にとがった爪(くわ)があり、その爪(くわ)の一つのも
 のを独鉢、三つのものを三鉢、五つのものを五
 鉢といふ。(同)金剛杵(こんごうしょ)。

〔三鼓(さんぐ)〕(さんぐ) ①夜の十二時。(同)三更。(2)雅樂
 用の三種の鼓。太鼓(だいこ)・羯鼓(かくこ)・鉦鼓(しらこ)
 〔三德(さんとく)〕(さんとく) ①正直・剛克(かうく)・愛克(あい)
 の三の意。剛克(かうく)は剛をもつて治めること。(書)洪
 範(こうはん)。(2)知仁勇(ちじゆゆう)。(3)天・地・人の
 德。(4)(仏)法身(仏の悟りの本体・般若(はんじやく))
 (迷いを脱した仏の妙知・解脱(くつ離)・俗世間を
 脱した仏の妙知・解脱(くつ離))。

〔三閨(さんげん)〕(さんげん) 三閨の間(あいだ)。(同)屈原のこと。
 〔三韓(さんかん)〕(さんかん) 朝鮮(あさひん)の三国。(1)馬韓(まかん)
 (2)辰韓(ちんかん)。(3)弁韓(べんかん)。(同)春秋時代の楚(そよ)の官名。
 〔三閭大夫(さんけふだいふ)〕(さんけふだいふ) 富と君との親任。(同)國家の權力である立
 法權・司法權・行政權。(1)一・分立(ぶんり)
 〔三間(さんげん)〕(さんげん) 三間の三間大夫(さんけふだいふ)。屈原のこと。

〔三間(さんげん)〕(さんげん) 三間の三間大夫(さんけふだいふ)。屈原のこと。
 〔三拍子(さんぱいし)〕(さんぱいし) (國)①音楽の拍子
 の一。(2)三種の条件。(3)すべての条件。
 〔三神山(さんじんさん)〕(さんじんさん) 三審(さんしん)に同じ。
 〔三相對(さんじょうたい)〕(さんじょうたい) 〔對(たい)〕(たい)の三つで一そろいの掛
 物。(2)(3)二つで一そろいになるもの。
 〔三連尊(さんれんそん)〕(さんれんそん) 〔三尊〕(さんそん)三の尊のもの。朝廷では爵
 位(くわい)で年齢(ねんりやう)・世(せい)・徳(とく)の三の尊のもの。

〔三達德(さんたつとく)〕(さんたつとく) 〔三德(さんとく)〕(さんとく)同じ。(中庸)
 〔三閭大夫(さんけふだいふ)〕(さんけふだいふ) 〔三達德(さんたつとく)〕(さんたつとく)の三
 〔三番叟(さんばんし)〕(さんばんし) 〔番叟(ばんし)〕(ばんし) 〔對(たい)〕(たい)の次に黒
 い老人の面をつけて舞うもの。(2)之(の)居で暮あ
 きの祝儀(しゆぎ)。(3)軽じて事の初め。発端(はつばん)。
 〔三柱形(さんしゆけい)〕(さんしゆけい) 光線を分解する三角
 形のガラス。(アクリル)

〔三論宗(さんりゅうそう)〕(さんりゅうそう) 〔宗(そう)〕(そう)の三論宗(さんりゅうそう)。推古天皇(あきらかに)
 〔三十六峰(さんじゅうろくほう)〕(さんじゅうろくほう) 〔峰(ほう)〕(ほう)のとき、高麗(たかくい)の僧慧遠(けいえん)
 が諸葛孔明(しょくかつうみやう)が伝えたの
 〔三十六峰(さんじゅうろくほう)〕(さんじゅうろくほう) 〔山(さん)〕(さん)の山の峰。(1)中國の嵩山
 〔三十六峰(さんじゅうろくほう)〕(さんじゅうろくほう) 〔山(さん)〕(さん)の山の峰。(2)京都の東山の山の
 〔三十六計不(ふ)如(く)逃(とう)〕(さんじゅうけいふくとう) 戰(せん)いに出でぐすまじに逃(とう)ふもの。逃
 げるべき機会を見て逃げることが良計である。

転じて、困ったときには逃げるのが一番よいの意。逃は道もともと書く。〔冷夜話〕(同三十六策走為上計)は「上計」(はしごぢゆう)、「下計」(はしごぢゆう)、「中計」(はしごぢゆう)、「下計」(はしごぢゆう)。

〔三十而立〕(じゅうじつじてき)三十年配になって何物にも動かされない信念を打ち立てること。

〔論為政〕(ろんいわせう)三十一年の車の輪轍が一つの轍に集まる。その轍を中心は空虚である。この空虚な中に車軸が通つて、はじめて車の用をする。このように虚無無為を尊ぶべしとする老子の教え。

〔三三九度〕(さんさんくど)〔國〕結婚の儀式にする夫婦の縁を固めるためにとりかねす杯。「さま。

〔三千世界〕(さんぜんよせう)世人、五人ともばらにいる三千の愛(さちあい)。この世界。

〔三千寵愛〕(さんぜんちゅうあい)多くの侍女に対する寵愛。「白居易・長恨歌」。

〔三寸之轍〕(さんすんのじせき)車のくさびは、わずか三寸であるけれども、これがなければ車の用をしないたい物事の主要なものをいう。〔淮南子・問訓〕

〔三寸不律〕(さんすんふりつ)不律の「ぶりつ」をつづめて発音する。三寸はその長さ。

〔三民主義〕(さんみんしゆぎ)中国の革命家孫文が唱えた思想。民族(の独立)・民權(の尊重)・民生(土地を農民に分配して生活を保障し、民族資本をつくる)の三つの主義。

〔三宅觀(觀)・瀧(瀧)〕(みやけ・たきらん)一六五五~一七一八。江戸中期の儒者。名は絆明(めいめい)、号は観鶴(かんづる)。はじめ見足(みあし)に学びのち木下順庵(しんあん)に学んだ。

〔三年不穀〕(さんねんふく)父母の喪。三年は足か年(せい)の意で、二十五ヶ月。(礼・三年問)

〔三年不寐〕(さんねんふまい)園(そのうゑ)がわはうす。一年に閉じこもつて刻苦勉励すること。漢の董仲舒

書・董仲舒伝)が庭にも出でないで勉強した故事。(漢三年不穀・書・董仲舒傳)

〔三年不穀・書・レ鳴〕(さんねんふく・しょねんなかむ)事もしない意。春秋時代、楚の莊王は位について三年たても令を出さなかったので、伍

てはばらく處忍自重して消極的であるたゞえ。費は飛鳥も書く。〔史・楚世家〕

〔二旨相公〕(じしょじょうこう)能く無能な宰相をあけつていう語。北宋時の神宗のとき、宰相の王珪(わい)が、つねに聖朝といふことを口にするだけであった故事。〔宋史・王珪伝〕

〔三位元帥〕(さんみげんさい)〔身の體〕(じみ)。(1)仏は法身。一心應身。報身の三位に分かれる。そのものは一体だということ。(2)キリスト教で、父天帝・子(キリスト)・聖靈の三位が一体だということ。

〔二段論法〕(さんざんりんぽ)大前提・小前提・結論の三段に並べて論ずる論理の方式。

〔二皇五帝〕(さんごうごてい)中国古代伝説上の帝王。伏羲(ふげい)・神農(じんのう)・三皇と少昊(すひ)・黃帝(こうだい)・顓頊(せんねき)・堯(よう)・舜(しゅん)の五帝をいう。

〔三面六臂〕(さんめんろくび)顔が三つとひじが六つある意で、ひとりで數人分の働きをするたとえ。

〔三善清行〕(さんぜうせいぎやく)平安時代の文学者。詩文に巧みで延喜格式の編集と醍醐天皇奉つた意見十二か条と有名。

〔三戰(戰)・三走〕(さんせん・さんそう)二度戦って三度逃げる。(史・管仲伝)「吾嘗(おも)一、鮑叔不以(ふ)為(わ)怯(へ)」(同三戰三北)。「今は伝わらない。統いたあとで、四日間あたかい日が続く

〔三種五典〕(さんしゅうごてん)三皇五帝の書といふが、三年の意で、二十五ヶ月。(礼・三年問)

〔三二・舞三治〕(さんさんくわさんじ)さんさんからだにたまつたび香を塗り、たび湯あみをして身を清めること。

〔上〕(じょう)一、数えかみ。あげる。〔上〕(じょう)解字。指事。甲骨文字ではと書く。横線は水準でそれより高い方を示す。

〔上〕(じょう)二、数えかみ。あげる。〔上〕(じょう)解字。指事。甲骨文字ではと書く。横線は水準でそれより高い方を示す。

表面。〔3〕いたまき。「頂上」。(4)きみ。天子を尊んで呼ぶこと。〔5〕そら。天。(6)めうつ。ほとり(涙)。かたわら。〔川上〕。(7)たかい。高い所。(8)すぐれたもの。「上等」。(9)たつとぶ。(10)あげる(ぐ)。あがる。(11)のぼる。のぼらせる。「上書」。(12)平上・上・去・入の声。

〔上戸〕(じょうど)〔1〕じゅうじゆ。〔2〕富民。(3)じゅうじゆ。酒。〔4〕たかひ。下戸。

〔上元〕(じょうげん)〔1〕天にのぼる。昇天。(2)天帝造物者。(3)空。(4)冬の空。

〔上半〕(じょうさん)午前。明けから正午まで。

〔上戸〕(じょうど)〔1〕じゅうじゆ。〔2〕富民。(3)じゅうじゆ。酒。〔4〕たかひ。下戸。

〔上木〕(じょうぼく)〔1〕版本に彫る。(2)出版す

がく)巧みないこと。またその人。名人。(3)手芸。技術や芸能のあるもの。〔4〕うえの方。(5)下手も。(6)手も。(7)下手も。(8)かみ。(9)芝居の舞台に向かつて右の方。(10)下手も。(11)上方。

〔上日〕(じょうじゆ)①月の第一日。ついたち。(12)宮中の宿直の日。また、その当番の者。

〔上國〕(じょうこく)〔1〕くわいの。前日。反は、下から上まつすぐのぼること。升は、降の反す。のみのぼること。昇は、升に同じ。日のぼること。陞は、はんだかのぼること。昇職にあがめている。陞は、高いところのぼる。官職をおしあげる。陞は、だんだんとすすむがあること。

〔上水〕(じょうすい)飲料として川や池から引いた水。

〔上代〕(じょうだい)〔1〕昔。〔2〕奈良なら時代。

〔上冬〕(じょうとう)冬の最初の月。陰曆十月。

〔上半〕(じょうさん)二つに分けた上の半分。

〔上平〕(じょうへい)〔1〕古太古。〔2〕歴史の大昔。〔3〕國の時代。

〔上司〕(じょうし)〔1〕時代区分。大和(だいわ)時代。(2)役人。

〔上布〕(じょうふ)〔1〕上級の官房。(2)上級の上等の麻織物。

〔上平〕(じょうへい)〔1〕漢字の四声の一である平声(ひょうせい)を上下に分けたもの。〔2〕高く平らかに發音する。(2)現代中國語の高く平らな声。

〔上田〕(じょうだい)〔1〕江戸時代の武士の盔甲(けいきやく)。〔2〕ひとの(1)に同じ。(2)江戸時代の武士の盔甲。

〔上甲〕(じょうじやく)〔1〕身分の高い侍。(2)人格が高すぐれた男子。(3)周代の士の最上位。

〔上旨〕(じょうし)〔1〕天子の意旨。〔2〕上意。

〔上旬〕(じょうじゅん)月の一日から十日までの間。(同上)院(いん)・上廟(じょうびょう)・中旬(ちゅうじゅん)・下旬(げじゅん)。

〔上氣〕(じょうき)〔1〕うみ。〔2〕海上の波。逆上。

[上作] (じょうさく) ①できほどのよしもの。上で引き立てる。名作。②田畠の作物のよきひばり。豊作。

[上乐] (じょうらく) いきさのすぐれなかつこと。
[上医] (じょうい) すぐれた医者。

[上告] (じょうごう) (法) 第二審の裁判の判決を不服として、その変更を求める上訴すること。

[上声] (じょうせい) 漢語の四声の一。しらあがりの音。↓付録漢文について。
[上寿] (じょうじゅ) 百歳。また、百二十歳。

[上足] (じょうしゆ) 弟子そのうちすぐれたもの。

[高富] (こうふ) 「漢書・朝鮮伝」。②都へ行く。

[上京] (じょうきょう) ①みやこ。(後) 国へ上るから下りへさしむける使者。朝廷から将軍家へ、また、将軍家から大名へさしむける使者。

[上官] (じょうかんかん) ①都に近い国。
[上國] (じょうこく) 豊かなよい国。「國」や飛鳥等時代、大宝令によって四階級に分けられた国々の第二位。
[上使] (じょうし) ①大臣・中國・下国等の司。

[上肢] (じょうしそく) 上級の官吏。うわくや。上月。弓の弦を上にした形の八。九日ごとの半円の月。

[上月] (じょうげつ) 上の方にのぼる。④下降。

[上肢] (じょうしそく) ①上級の官吏。うわくや。上月。弓の弦を上にした形の八。九日ごとの半円の月。

[上知] (じょうち) すぐれた知恵。また、その文書。同上書・上殘等。上策。

[上雨] (じょうう) ①よい雨。欲するときに降る雨。同時雨。(2) 雨もり。

[上乘] (じょうじょう) ①すべての迷いを捨てて真理を得ること。また、その悟り。(2) 大乗に同じ。④下乗。〈国〉藝術作品など。の最上のできばえ。

[上品] (じょうひん) ①國の上品。品地方から産する絹。
[上奏] (じょうじょう) 天子に申し上げる。

[上帝] (じょうじやく) ①天の神。造化の神。造物主。天帝。(2) 天子。(3) 上古の帝王。造物主。(4) 王。

[上指] (じょうし) ①上旨に同じ。②上方の指をさし示す。〔史・項羽紀「頭髪一上」
[上段] (じょうだん) ①上の段。(2) 上座。(國) 剣道で、刀を頭の上にかまえること。〔下界。上洛(じょうらく) ①神のいる所。天上界。(4) 都へのぼる。都へ行く。〕
[上界] (じょうかい) ①神のいる所。天上界。(4) 位を譲つた天皇の敬称。

[上計] (じょうけい) すぐれた計略。

[上將] (じょうじょう) 首席の大將。第一の上將(じょうじょう) ①流れのかみの方。川かな。

[上將軍] (じょうじゅぐん) 全軍の総大將。高い身分。

[上座] (じょうざい) ②社会。③すぐれた品位。同上品。

[上浣] (じょうせん) 座席、または上方の座席。④下座。末席。

[上僧] (じょうそう) ①僧の最高位の者。

[上院] (じょういん) ①院制の国会の一院。④下水道(じょうすいどう) ①流れのかみの方。川かな。

[上途] (じょうと) 旅立ちする。かどで。

[上書] (じょうしょ) 上表に同じ。

[上根] (じょうこん) ①生れつき賢く、仏道修行に根柢の強い者。下根。

[上納] (じょうのう) 租税などを官におさめる。

[上馬] (じょうま) ①すぐれた馬。よい馬。(2) 馬に乗る。④下馬。

[上啓] (じょうけい) 朝廷に申し上げる。

[上陸] (じょうりく) ①船から陸にあがる。②台風などが海上から陸地にやつてくる。

[上粹] (じょうすい) ①書物を印刷するために梓(梓)の版木に文字を彫る。②出版する。

[上略] (じょうりゃく) 文章などの初めの部分を省略する前略。対下略。「子呼来不レーレー」。

[上輩] (じょうばい) 周代、卿の上位のもの。

[上卿] (じょうけい) 周代の貴婦人。先輩。

[上尊] (じょうそん) ①上等の酒。また、人から贈られた酒。(2) 位にあって尊い身分の者。

[上達] (じょうだつ) 昔の時代、上代。「る」学問や技芸などが進歩したこと。また、その式。棟上部(じょうじょうぶ) ①流にある土地。

[上棟] (じょうとう) 〈國〉家を建てるとき、柱(柱)をさし組み立て。その上に棟木(棟木)をあげる。

[上遊] (じょうゆう) ①川かな。上流。(2) 川の上。

[上牋] (じょうと) 上表に同じ。

[上腰] (じょうごう) ①腰(腰)の筋。②出勤・当直などをすること。対下番。

[上書] (じょうしょ) 上を書に奉ること。またその文書。同上書・上表。

[上策] (じょうさく) ①すぐれたばかりごと。同上計。(2) 下策。②上表に同じ。

[上等] (じょうとう) ①上の位。②品物などはすぐれてよいこと。③下等。一種種。④下乗。⑤下乗(じょうじょう) ①身分の尊い人。同上。

[上訴] (じょうそ) ①上表に訴える。②(法) 判決または決定に対して、上級の裁判所にその取消または変更を求めること。

[上眉] (じょうび) ①天にのぼって仙人になれる。僊(僊)は仙。「莊・天地」。(2) 死ぬ。同上仙。

[上意] (じょうい) 君主の心。君主の命令。同上意。

[上將軍] (じょうじゅぐん) 大名の意志・命令。

[上眉(眉)] (じょうび) 重なっているものの上のもの。上の重なり。(2) 上の階級。

[上藤] (じょうとう) ①藤(藤)。②死ぬ。同上仙。

[上膊] (じょうばく) ①腕のひじから肩までの間の部分。

[上聞] (じょうぶん) 天子の耳に入れる。

[上熟] (じょうじゅく) よく熟る。じゅくぶん熟する。

[上賢] (じょうけん) すぐれて賢い人。

[丈] (じょう) 1. 当(當) (じょうとう) —たけ
 2. 文(文) (じょう) — 実(じ)

[丈] (じょう) 1. 長さの単位。一尺の十倍。(周代の一尺は、一二・五センチメートル)。わが国では、約三・〇三メートル。↓付録度量衡表。(2) から成る。十は手を広げた親指の先から中指の先までの間の意。

[丈基] (じょうき) ①長さの単位。一尺の十倍。(周代の一尺は、一二・五センチメートル)。わが国では、約三・〇三メートル。↓付録度量衡表。(2) から成る。十は手を広げた親指の先から中指の先までの間の意。

[丈丈] (じょうじょう) ①丈(丈)の妻(妻)。丈(丈)に対する敬称。丈(丈)訓(じょう)。(3) 妻の父。しゅうとう。(4) 祖父。(5) 教父。

